

# 怪物の内臓を腑分けする

—— キューバの独立運動指導者ホセ・マルティの「反米」——

竹 村 文 彦

## はじめに

1898年の米西戦争に勝利したアメリカ合衆国は、スペインからフィリピンやプエルトリコを獲得し、キューバをみずからの保護下に置いた。これまで北米大陸内で膨張を続けてきた合衆国が初めて海外に勢力を拡大した点で、米西戦争は米国史上、ひとつの転換点を画す出来事であった。合衆国進出の動きが明らかになると、ラテンアメリカ<sup>1)</sup>の知識人たちは直ちに反発した。ニカラグアの大詩人ルベン・ダリーオは、評論「キャリバンの勝利」(1898年)の中で、「嫌だ、銀の歯をしたあんな野牛の仲間になることなどできない。まっぴらだ。やつらは私の敵、ラテンの血を忌み嫌う者、〈野蛮人〉だ」“No, no puedo, no quiero estar de parte de esos búfalos de dientes de plata. Son enemigos míos, son los aborrecedores de la sangre latina, son los Bárbaros.”<sup>2)</sup>と叫び、ウルグアイの評論家ホセ・エンリケ・ロドー José Enrique Rodó は『アリエル』 *Ariel* (1900年)を著して、合衆国の功利主義や物質主義を批判し、ラテンアメリカの若者に古典古代の全人的教養主義<sup>しょうよう</sup>を奨励した。米西戦争を皮切りに再三くり返されてきた合衆国の政治的・軍事的な干渉は、ラテンアメリカに根強い反米の風潮を生んで今日に至っている。

米西戦争以前の合衆国とラテンアメリカの交渉に目を転ずると、合衆国はメキシコとの戦争に勝って1848年、テキサスとカリフォルニアを領土に加えた。しかしその後は南北戦争のような大問題を国内にかかえたこともあり、19世紀末に至るまで南の国々に触手を伸ばすことはなかった。ラテンアメリカの知識人たちも大半は、合衆国を先進的な文明国家として尊敬し、模倣すべき手本と捉えていた<sup>3)</sup>。たとえばアルゼンチンの文筆家で大統領も務めたドミンゴ・ファウスティノ・サルミエントは、「合衆国に追いつこう。〔中略〕合衆国になろう」“Alcancemos a los Estados Unidos. [...] Seamos Estados Unidos.”<sup>4)</sup>と訴えた。そんな時代にあって、合衆国の南方への進出の兆候を嗅ぎ分け、警鐘を鳴らしたのが、キューバの独立運動の指導者にして詩人、ジャーナリストのホセ・マルティ(1853-1895年)である<sup>5)</sup>。彼は〈われらのアメリカ〉Nuestra América という呼び名でラテンアメリカ諸国を包括し、その一体性を強調するとともに、この所有形容詞によって別のアメリカを分離して彼我の対立をあらわにした。マルティ本人も自分の先見性は充分

自覚していて、「危険を察知すべきなのは頭上に迫ってからではなく、まだ身をかわせるときだ。政治において一番肝心なのは、解き明かし、予見することだ」“Los peligros no se han de ver cuando se les tiene encima, sino cuando se los puede evitar. Lo primero en política, es aclarar y prever.”<sup>6)</sup>と述べている。

1810年代から1820年代にかけて、ラテンアメリカの国々は次々に独立を達成していったが、キューバはプエルトリコとともに19世紀後半に入ってもスペインの統治下に留まっていた。1868年に勃発した第一次独立戦争（「十年戦争」）の最中、マルティは独立派を支持した嫌疑で祖国を追われ、スペイン、メキシコ、グアテマラなど各地を転々としたあげく、1881年8月にニューヨークに居を定める。この大都市ではキューバの移民や亡命者と連携して第二次独立戦争の準備を着々と進め、92年にキューバ革命党を結成。95年の4月、ついにキューバ島に侵攻するが、5月19日にあえなく戦死を遂げた。のべ15年に及んだニューヨーク生活の間、マルティはベネズエラの「ラ・オピニオン・ナシオナル」*La Opinión Nacional*、アルゼンチンの「ラ・ナシオン」*La Nación*、メキシコの「エル・パルティード・リベラル」*El Partido Liberal*といった大新聞や雑誌に合衆国の生活万般をめぐる「時事通信」*crónica*を寄せていた。これらの通信は全部で3百篇弱の数にのぼり、全集の実質25巻のうち5巻を占める大部なものだ。ガーフィールド大統領の暗殺、チャールストンの町を全壊した地震、家畜の品評会、女性の参政権、詩人ホイットマン等々、取り上げられる話題は多彩をきわめ、「当時の合衆国の生活に関する百科事典」“una enciclopedia norteamericana de aquellos años”<sup>7)</sup>の趣がある。本稿ではこの新聞・雑誌記事を主な題材にし、マルティが合衆国のどんな側面から反米に傾いていったのか、その反米の言説はどのように表明されているのかをテキストに即して見てゆく。

## I 経済的繁栄への驚嘆、拝金主義への批判

マルティが目撃した1880年代のアメリカ合衆国は、南北戦争と「再建の時代」を経て、産業資本主義が勝利を収め、世界一の工業国へと急成長する途上にあった。電話と白熱電灯もそれぞれ1876年、1879年には発明されており、科学や機械技術の発展に伴い、鉄道網が広大な国土に張り巡らされて大都市が形成された。こうした最先端の近代文明をマルティはどのように受け止めたのか。

マンハッタン地区とブルックリン島を結んだブルックリン橋は、当時世界最長の吊り橋で、革新的な技術の投入と14年の工期を要して1883年5月に竣工した。竣工の翌月、マルティは「ラ・アメリカ」*La América*誌に寄せた通信でさっそくこの吊り橋を取り上げる。通信は、巨大建造物の完成に沸き立つニューヨークの人々の様子から始まる。橋の上に群れつどう群集を見ながらマルティは、その上空に「鷲のように大きな白い手を、地上の平和の印として広げた」“con las manos blancas, grandes como águilas, abiertas, en signo

de paz sobre la tierra” (269) 〈自由〉が座る姿を思い描く<sup>8)</sup>。マンハッタン側の入口から入ると、建築資材を積んだ荷車や郵便馬車、裕福な婦人を乗せた馬車や裸馬にまたがる若者などが馬車用の車線を往来している。通行料の1セントを支払って遊歩道を進むと、その下を「素早い伝令か小ぶりの怪物のような」“como veloces recaderos y monstruos menores” 汽車が走るのが見える。「私たちの足の下は一切が鉄製の織物、網、レースである——路面に組み合わせられた鉄棒も、はたまた糸の優雅さ、軽やかさ、繊細さで5本の道を分けている仕切りも」“Y por debajo de nuestros pies, todo es tejido, red, blanda de acero; las barras de acero se entrelazan en el pavimento y las paredes que dividen sus cinco anchas vías, con gracia, ligereza y delgadez de hilos”。橋塔の上部に穿たれた2つのアーチは、「精神を朗らかにしてくれる雄大な世界への扉のように見える。あの巨大な支柱を前にすると、従順な感謝の念、荘厳なものの忠言を感じ、宗教的な感動を覚えた私たちの心のうちに山の頂が聳え立つ心持ちがする」“Parecen [...] como las puertas de un mundo grandioso, que alegra el espíritu; se sienten, en presencia de aquel gigantesco sustentáculo, sumisiones de agradecimiento, consejos de majestad, y como si en el interior de nuestra mente, religiosamente conmovida, se levantasen cumbres。”(270)。橋床は全長の真ん中が一番高く135フィートあり、大型船も難なく下をくぐれるようになっている。実際、イースト川では蒸気船が汽笛を鳴らしたり、ランチが積荷を下ろしたりしている。橋を渡り切ると、「ニューヨークから私たちを押してきた人の群れ」“la turba que nos venía empujando desde New York”は、口々に感嘆の叫びを発しながら街に散ってゆく。「壮大なものは人を喜ばす」“Regocija lo inmenso。”(271)のだ。

ブルックリン橋の巨大な姿にマルティは心を動かされ、それを生み出した科学技術の進歩に驚嘆している。だから橋の情景を描き出すだけでは満足せず、目に見えない構造や建造の過程にまで関心を寄せ(『ラ・アメリカ』の読者の皆さん、橋の両端にある大きな橋台<sup>アンカーレイジ</sup>を目でもって持ち上げてください)“Levanten con los ojos los lectores de *La América* las grandes fábricas de amarre que rematan el puente de un lado y de otro。”(272)、そこで駆使されている技術や仕組みを細大漏らさず記述しようとする。吊り橋を支える4本の主ケーブルはどうやって河の両岸に固定されているのか？ 橋塔の基礎を造るための<sup>ケーソン</sup>潜函工法とはどんな方法なのか？ 主ケーブルはどんな手順で橋の端から端まで渡されたのか？ ここに至ってマルティの言語は、描写する技術や機械の複雑さ、先進性を映し出すかのように難解になり、ときに「解読不能」“la ilegibilidad”<sup>9)</sup>の域に達する。ここでは主ケーブルを橋に架設する手順を、かいつまんで見ておこう。まず蒸気船を用いて2本のロープを橋の全長に渡し、その両端を結んで滑車を取りつけ、スキー場のリフトのようにぐるぐると巡る「旅するロープ」“cuerda viajera” (274)をつくる。次いでこのロープに車輪のような器具(スピニング・ホイール)をつけ、それにワイヤをかけてからロープを旋回させ、ワイヤをもう一方の端まで渡す。この操作を何度もくり返し、278

本のワイヤを渡し終えると、これを撚り合わさずにそのまま束ねて（「平行線ケーブル」）一本の子<sup>ストランド</sup>縄とする。この子縄を19本束ねたものが一本の主ケーブルである。「それからケーブルそのものから吊り下がっている<sup>いかだ</sup>筏の一種に乗って、空飛ぶ編み物職人たる外装の担当者がこの円筒形の塊をワイヤで覆ってゆく。そのワイヤは、船の舵輪に似た単純な器具のリールに巻き取られていて、そこから螺旋を描きながら出てくる。こうしてボア〔主ケーブルのこと〕はきちんと服を着せてもらうと、橋塔の頂上で待ち受ける溝のついた板金の上に設置される。板金は滑らかに動く車輪の上に乗っているが、それはケーブルが伸縮してもその重みで建築物に被害を与えないためだ” “y sobre una especie de balsa ambulante que del mismo cable cuelga, van, tejedores del aire, los forradores, envolviendo la masa circular con alambre, que una sencilla máquina, semejante a una rueda de timón, que lleva el alambre enrollado en una carretel, va dejando salir en espiral: —y, ya la boa bien vestido, lo posan en su plancha acanalada que, sobre ruedas corredizas, para que el cable pueda extenderse y encojerse, y no dañar la fábrica con su peso, lo espera en la cumbre de la torre.” (274)。

ブルックリン橋の巨大さを表現するために、マルティはしばしば比喩やたとえを活用する。2つの橋塔は、「エジプトのピラミッドを細くしたように見える」“parecen pirámides egipcias adelgazadas”。歩道橋に身を置いた見物客たちは、「山の頂上付近から谷底を見下ろす断崖のようところで今日鈴なりになっている」“se apiñan hoy como entre tajos vecinos del tope a lo hondo en el corazón de una montaña” (269)。硬くて白い石でできた橋台は、「ナイル河の流れも堰き止められるだろう」“cerrarían el paso al Nilo” (272)。この橋のある風景の中では、ワイヤを渡す車輪のような器具も「働き者の蟻」“hormiga trabajadora” (274)、川に浮かぶ蒸気船も「白い蟻」“hormigas blancas” (275) に過ぎない。また、具体的な数値が巨大さを示すこともある<sup>10)</sup>。<sup>くだん</sup>件の橋台は縦119フィート、横132フィート、高さ90フィートの立方体に近い形で、重さは1億2千ポンドある。遊歩道を含めて5本の車線からなる橋床は、全長3,178フィート、横幅は85フィートある。橋塔は高さが276.33フィート、水面から基礎までの水深は78フィート、主ケーブルは重さが8,120トン、一本の直径は15インチある……。

前述のように、マルティはこの吊り橋に〈自由〉を見たが、その〈自由〉は「曙光が兆している新たな世界の母」“la madre del mundo nuevo, —que alborea.” (269) である。4本の主ケーブルは、「前進する人間たちに道を切り開いてくれる、来たる世界の工兵」“zapadores del Universo por venir, que van abriendo el camino a los hombres que avanzan” (271) にも譬えられる。ところで、この「石と鋼鉄の驚異」“la maravilla [...] en piedra y acero” も、元はといえば「大胆な建築家の鉛筆の先のか細い線」“línea ligera en la punta del lápiz de un constructor atrevido” (269) なのだった。これだけの建造物を生み出したのは、詰まるところ、人間の知力と想念なのだ。それゆえ橋は、「人間精神のずっしり重い腕」“brazo ponderoso de la mente humana” (275) でもある。こうした達成は、人間が科学や産業技術

を発達させ、自然を征服することによって可能になった。川底を掘り削る作業を終えたのち潜函に注ぎ込まれた8千トンの水硬セメントは、「険しい障害をもうけた自然に人類が嫉妬して発明した物質」“masa que, celoso de la naturaleza que creó breñas duras, ha inventado el hombre.” (273) である。

とはいえマルティは、ブルックリン橋とそれを築いた先端的な技術を手放しに賛美しているわけではない。ここに描かれた吊り橋には、人類を破局に導きかねない凶暴なイメージも付きまとうのだ。弧を描く主ケーブルの形状は、あるときは「一突きで山を根こそぎにできそうなマンモス象の牙」“diente de un mamut que hubiera podido de una hozada desquiciarse un monte” (269) に譬えられ、またあるときは「柄を川の中に沈め、剣先を街に刺した〔中略〕曲がった新月刀」“alfanje encorvado [...] como si tuviera el mango al río y el extremo en la ciudad” (270) に見立てられる。同じ主ケーブルは、「腹を空かした蛇のようにとぐろを解き、ひゅうひゅうと鳴きながら一方の川岸から身を起こし、豪快な高さまで胴体を持ち上げると、水面から聳え立つ堂々たる支柱の上に腹をもたせかけ、反対側の岸の方へ頭部を下ろしてゆく」“como serpiente en hora de apetito, se desenroscan y alzan el silbante cuerpo de un lado del río, levántanse a heroica altura, tiéndense sobre pilares soberanos por encima del agua, y van a caer del lado opuesto.” (271)。見物客たちが「蟻のようにうごめく」“hormigues” (269) 一方で、橋床は「怪物的な蟻食いの舌」“lengua de hormiguero monstruoso” (271) に譬えられる。マルティがこの橋を「美しい」と言い切れず、「美しいというより巨大だ」“menos bella que grande” (275) と評しているところにも、彼の両価的な感情が窺える。

ブルックリン橋の記事より1年半ほど前、マルティは同区南端に位置する海浜行楽地コニー・アイランドをめぐる通信をコロンビアの「ラ・プルーマ」*La Pluma* 誌に寄せていた(1881年12月3日<sup>11)</sup>)。ここでマルティは、想定されるコロンビアの読者と心理的に一体化して「私たち」を名乗り、読者の視点からラテンアメリカを「こちら」、実際に自分が身を置く合衆国を一貫して「あちら」と呼んでいる。この通信でも彼は、合衆国の空前の繁栄ぶり(「人類の歴史の中で、アメリカ合衆国の驚嘆すべき繁栄に匹敵するものは何もない」“en los fastos humanos nada iguala a la prosperidad maravillosa de los Estados Unidos del Norte”, 82)、施設などの規模の大きさ、科学技術の達成に目を見張る。コニー・アイランドは、「人々であふれ返り、豪華なホテルが点在し、宙空を走る鉄道〔高架式の鉄道〕に貫かれていて、そこに庭園や、あずまやや、芝居小屋、ビール店、サーカス、テント、群れをなす馬車、画趣に富む人々の集まり、移動式の小屋、八百屋、噴水などが彩りを添える」“rebozante de gente, sembrado de suntuosos hoteles, cruzado de un ferrocarril aéreo, matizado de jardines, de kioscos, de pequeños teatros, de cervecerías, de circos, de tiendas de campaña, de masas de carruajes, de asambleas pintorescas, de casillas ambulantes, de vendutas, de fuentes.”。矢継ぎ早の列挙は、雑多なものが所狭しとひしめき合う様子を如実に伝え



る。ここには「何十万という数のニューヨークの人々が毎日押し寄せる」“un centenar de miles de neoyorquinos que acuden [...] diariamente.”ばかりでなく、合衆国のはるか彼方からも「果敢なご婦人や粋な農民の大軍」“legiones de intrépidas damas y de galantes campesinos”が「この目もくらむ多彩さ」“la variedad cegadora”を嘆賞しに来る。「蒸気船は行ったり来たりし、汽車は汽笛を鳴らし、煙を出し、発車したかと思うとまた到着し、家族連れで充満した蛇のような腸<sup>はらわた</sup>を浜辺にぶちまける」“Van y vienen vapores; pitan, humean, salen y entran trenes; vacían sobre la playa su seno de serpiente, henchido de familias” (83)。マルティによれば、「あそこで驚かされるのは規模であり、量であり、人間の活動の突如として生ずる成果であり、歴大な数の民衆に向けて開かれたその巨大な快楽のはけ口」“lo que asombra allí es, el tamaño, la cantidad, el resultado súbito de la actividad humana, esa inmensa válvula de placer abierta a un pueblo inmenso”であり、さらに「その可動性、その前進力、その攻撃性、その変貌、その富を競い合う熱狂」“esa movilidad, ese don de avance, ese acometimiento, ese cambio de forma, esa febril rivalidad de la riqueza” (84)である。彼は叫ぶ、「それにしても、何と激しく人が行き交い、金銭がやり取りされ、あらゆる歓楽に便宜が供されることか！」“Pero ¡qué ir y venir! ¡qué correr del dinero! ¡qué facilidades para todo goce!” (84-85)。そしてこの行楽地の賑わいは、「6月から10月までの早朝から深夜まで、全く途切れもせず、変わりもせず続く」“duran desde junio a octubre, desde la mañana hasta la alta noche, sin intervalo, sin interrupción, sin cambio alguno.” (85)のだ。やがて帰る時間がくると、「あの怪物のような巨大な群集は、寄り集まって押し合いへし合いしながら汽車の乗り口に殺到する。と、ぎゅうぎゅう詰めになったその汽車は、群集の重みに耐えかねてうめき声を漏らす」“como monstruo, aquella muchedumbre colosal, estrujada y compacta se agolpa a las entradas de los trenes que, repletos de ella, gimen, como cansados de su peso” (86)。ブルックリン橋を我が物顔で占拠していた〈群集〉が、ここでもまた幅を利かせている。

この行楽地は4つの街からなるが、マンハッタン・ビーチにあるホテルの食堂は、「一度に4千人もの客をゆうに収容できる」“caben holgadamente a un mismo tiempo 4000 personas”。ロッカウェイのホテルは、「村どころか国に見える」“ya no pueblos parecen, sino naciones”。一番魅力的な街であるゲイブルに設置された「エレベーターは、私たちの大聖堂の塔よりも高く、利用客は小さくて華奢な檻<sup>きゃしゃ</sup>に入れられて、めまいのする高さまで吊り上げられる」“su elevador más alto que la torre de nuestra Catedral —a cuya cima suben los viajeros suspendidos en una diminuta y frágil jaula a una altura que da vertigos” (83)。夜になると、電灯の明かりがこの世ならぬ光景を現出する。「少し離れた海上から見ると、4つの盛り場は夜陰の中に煌々と輝いて際立ち、まるで空に綾なす星々が4つの巨大な集団にまとまり、突然、海に落ちてきたかのようだ」“Vistas a alguna distancia desde el mar, las cuatro poblaciones, destacándose radiosas en la sombra, semejan como si en cuatro colosales grupos se hubieran reunido las estrellas que pueblan el cielo y caído de súbito en los mares”。電灯

は、浜辺の「砂粒も数えられそう」“*podrían contarse [...] los granos de arena*” (85) なほど明るく、「真昼時のように、皆があらゆる場所で新聞やプログラム、広告や手紙を読んでいる」“*Como en día pleno, se leen por todas partes periódicos, programas, anuncios, cartas.*” (86)。白熱電灯の発明がわずか2年前の1879年のことであったのを見ると、その実用化と普及の早さには驚かざるを得ない。そもそも、これほどの施設と賑わいを誇るコニー・アイランド自体、にわか造りで、「ほんの少し前までは打ち捨てられた土砂の堆積」“*montón de tierra abandonado hace cuatro años*”なのであった。ロッカウェイの街にしても、「<sup>かぶと</sup>兜と<sup>やり</sup>槍で武装して生まれてきた〔ローマ神話の女神〕ミネルヴァよろしく、蒸気船や広場や波止場、さざめく楽団、ホテルで身を固めてお目見えした」“*ha surgido, como Minerva, de casco y lanza, armado de vapores, plazas, muelles y orquestas murmurantes, y hoteles*” (83)。先の引用中の「人間の活動の突如として生ずる成果」とは、まさにこうしたものを指すのだろう。

ところで、コニー・アイランドを訪れた〈群衆〉はどんなことをしているのか？ ある者は、「こちらの土地の私たちと同じような考え方をする人士の非難や驚きを気にもとめず」“*se cuidan poco de las censuras y los asombros de los que piensan como por estas tierras pensamos*”、海辺に横たわって日光浴をする。「なぜなら、それが健康的な行為だと見なされており、また、表面的で低俗でこれ見よがしな親密さのために絶好の便宜を提供するからだ」“*porque esto es tenido por ejercicio saludable y porque ofrece singulares facilidades para esa intimidad superficial, vulgar y vocinglera*” (84)。米国人の男女関係は、このように〈身体〉の触れ合いを通じて深められるのであり、それは「私たちの土地の慎み深く、優しく、高邁な愛」“*el pudoroso, tierno y elevado amor de nuestras tierras*” (85) とはほとんど無縁である<sup>12)</sup>。ある者は波打ち際に腰を下ろして、「あの力強くて身体によい空気で肺を満たし」“*llenan [...] sus pulmones de aquel aire potente y benigno*” (84)、ある者は体重を量っている。「なぜなら体重1ポンドの増減が、北米人にとっては確かな喜びないし真の苦悩の材料になるからだ」“*porque para los norteamericanos es materia de gozo positivo, o de dolor real, pesar libra más o libra menos*” (85)。また、切り紙細工を行なう手芸家を夢中になって見つめる集団もいれば、黒人の顔面にボールを命中させる遊びを見物しながら大笑いで拍手喝采する集団もいる。

この地が行楽地であってみれば、みなが快楽を追求するのは当然とも思えるのだが、マルティはここに集った人々のあり方に米国人の本質を見出す。米国人のことを「資産を手に入れたという熱望のみに胸をかき乱される人々」“*aquellos espíritus [...] turbados sólo por el ansia de la posesión de una fortuna*”と呼び、「あの広大な土地は精神が空っぽなのだ」“*aquella gran tierra está vacía de espíritu.*”と言い切る。そのような拝金主義者の生み出す文化がお粗末なもので、他の文化の猿真似の域を出ないのは仕方がないだろう。だから、「黒人の minstrel<sup>13)</sup>は、哀しいかな、スコットランドの minstrel のようにで

はないに違いない” “los negros *minstrels*, que no deben ser ¡ay! como los *minstrels*, de Escocia” (84) し、メリーゴーランドの回りでは「何人かの自称音楽家が、調子はずれのソナタを奏でる” “tocan descompuestas sonatas unos cuantos sedicentes músicos.” のだ。飲食物の好みについても同様で、ある者は、「理解しがたいことに嬉々として、曲射砲のように長細いグラスで不味いミネラルウォーターを飲む” “con incomprensible deleite, beben sendos vasos largos y estrechos como obuses, de desagradables aguas minerales.”。裕福な人々は、「ワインの代わりに出されるフクシンを煎じた飲み物や、芸術的で軽いものを好む私たちの舌なら間違いなく拒むであろうような硬くて奇妙な食べ物に大金を浪費する” “los adinerados dilapidan sumas cuantiosas en infusiones de fucsina, que les dan por vino; y en macizos y extraños manjares que rechazaría sin duda nuestro paladar pagado de lo artístico y ligero.”。端的に言えば、「あちらの人々は量を食べ、私たちは質を食べる” “Aquellas gentes comen cantidad; nosotros clase.” (85)。

かくて米国人の物質主義、享楽主義は、ラテンアメリカの人々のあり方と対比されて一層鮮明になる。「私たちを含めた他の民族は、崇高な内なる悪魔に貪られて生きていて、その内なる悪魔に駆られて愛なり栄光なりの理想をたゆまず追求する” “Otros pueblos —y nosotros entre ellos— vivimos devorados por un sublime demonio interior, que nos empuja a la persecución infatigable de un ideal de amor o gloria”。そこで合衆国に住むラテンアメリカの人間は、当初そこの生活にいかにも魅了されようとも「やがて孤独の苦悶に捉えられ、より高次で精神的な世界への郷愁に襲われ、悲嘆に暮れる。自分のことを母親も羊飼いいもない、群からはぐれた子羊のように感じる” “la angustia de la soledad les posee al fin, la nostalgia de un mundo espiritual superior los invade y aflige; se sienten como corderos sin madre y sin pastor, extraviados de su manda;” (84)。1880年にニューヨークに滞在した際、マルティは「ジ・アウア」*The Hour* 紙に「合衆国の印象」《*Impressions of America*》というエッセイを英語で寄稿し、そこですでにこう書いていた。「人生は永続的な根を求めている。知性の慰め、芸術の愉楽、魂の善良さと趣味の洗練がわれわれにもたらず内面的な報いといったものがなかったら、人生は不快である” “Life wants permanent roots; life is unpleasant without the comforts of intelligence, the pleasures of art and the internal gratification that the goodness of the soul and the exquisiteness of taste produce to us.” (1732)。ラテンアメリカ人が合衆国で「群からはぐれた子羊」のように感じるのは、まさにこの「永続的な根」から切り離されているからだ<sup>14)</sup>。ホテル暮らしが根のない生活であってみれば、同じ「合衆国の印象」で、作家が「ホテル暮らしを私たちにはいつまでも理解できないだろう” “the life in the hotel, that will never be understood for us” (1733) と語っているのも示唆的である。



## II 拝金主義の犠牲者たち——労働問題をめぐって

1880年代のアメリカ合衆国では、鉄道建設業、石油業、製鋼業などの事業で成功した大企業家や彼らに資金を調達した投資銀行家が、巨万の富を築いて社会に君臨した一方で、移民を中心とする労働者たちは搾取され、大都市のスラム街で極貧の生活を送っていた。マルティは、1886年10月15日の通信を「都市は腐りつつある」“Se pudren las ciudades”という言葉で語り出す。「他ならぬ自由の住処〔合衆国のこと〕の一方には、金色のバルコニーをもつ宮殿が立ち並び、宙を舞う女たちや頬をふっくらふくらませた満腹の紳士たちがいる。その一方、下水溝では、ねばねばした泥にまみれた蛭<sup>ひる</sup>のように、痩せこけて不恰好な労働者の子供たちが這いずり回っている」“En la morada misma de la libertad se amontonan de un lado los palacios de balcones de oro, con sus aéreas mujeres y sus caballeros mofletudos y ahítos, y ruedan de otro en el albañal, como las sanguijuelas en su greda pegajosa, los hijos enclenques y deformes de los trabajadores” (727)。高層建築に起居して「宙を舞う」人々と下水溝、この高低差はそのまま、富裕層と労働者のへだたりである。貧困はもはや「個人の不幸ではなく公的な犯罪」“no es una desgracia personal: es un delito público.” (733)であり、「国家的な病弊」“el mal nacional” (732)であるとマルティは断言し、1887年2月2日の通信では、石炭の運搬人夫の苛酷な状況を告発している。彼らは日雇い労働者で、仕事があるときだけ会社から雇われるが、波止場で常時待機している義務を負い、一日中待ち続けて何の仕事もないことも稀ではない。運よく仕事にありつけたとしても、せいぜい一日3、4時間で、80セントほどの金にしかない。暖を取る石炭は自腹で買わねばならず、月に稼ぐ25ドルから30ドルのうちの6ドルから8ドルは会社に支払う家賃に消える。そのうえ会社は石炭の値段を1トンにつき50セント値上げし、人夫の時給を2.5セント下げたため、人夫たちは賃金引き下げの撤回を求めた。会社側は話し合いに応じるどころか、労働者の暴力を恐れてピンカートン探偵社の探偵を雇い入れ、警護に当たらせるという対応に出た。ここに至って石炭関連の労働者たちは、一致団結してストライキに突入する。あるとき、労働者の子供たちが探偵に雪玉を投げつける事件が起きる。探偵は子供たちに向けて発砲し、一人を殺してしまう。それでも労働者たちは怒りを爆発させることもなく、1万人が集まって殺害された子供の葬儀を営んだ。やがて「1万人の男女は、温かい食べ物も石炭もないあばら家へ、終始押し黙って帰っていった。去年67ドルであった会社の株価は、今年135ドルに上がった」“los diez mil hombres, se volvieron a sus tugurios sin comida caliente, y sin carbón, siempre en silencio. La compañía cotizaba sus acciones a 67 el año pasado, y este año las cotiza a 135.” (832)。

労働者の貧困との関連において、マルティが槍玉に挙げるのは、主に共和党が提唱した保護貿易政策である。「保護貿易に対する自由貿易の擁護は、合衆国で作家の注意を引

いたあらゆる経済問題の中で、最も根本的と思えたもの」“De todos los asuntos económicos que llamaron su atención en Estados Unidos, la defensa del libre cambio frente al proteccionismo es el que le pareció más fundamental”<sup>15)</sup>であり、彼が好んで取り上げた話題であった。マルティの議論をまとめておこう。合衆国では高率の保護関税ゆえに外国からの輸入品が締め出され、値段の高い粗悪な品であっても国産品がよく売れた。莫大な利益を手にした企業家たちは工場を新設し、労働者を新たに雇い入れて経営の拡大に走った。しかしこの好況は、「関税の支え棒を外せば、たちまち総崩れしてしまう泡と気まぐれの土台」“estas bases de espuma y capricho, que, en cuanto les sacaran el puntal de la tarifa, vendrían todas a tierra.”の上に成り立っていた。やがて国内の需要は飽和に近づき、なかなか物が売れなくなる。国外の市場への進出に活路を求めても、合衆国の製品は安価で高品質な外国の製品には到底太刀打ちできない。「燃え上がる炎の目、鉄の腹をもった途方もない、偽りの工場は慄然として、幾千という手を天に向けて上げ始める」“Y la fábrica falsa, tremenda, con sus ojos de hoguera y su vientre de hierro, comienza a levantar al cielo espantada sus millares de manos.”(320)。道理からすればここでなすべきは、まず、関税を引き下げ、安価な外国製品に門戸を開いて物価を安くし、労働者が低賃金でも生活に困らないよう配慮すること、次いで、需要に合わせて生産を縮小することであった。しかるに企業家たちは、結束して関税の引き下げを阻止し、生産の規模を維持した。結局、消費は上向かず、工場は操業停止に陥り、労働者は賃金を下げられたり職を失ったりする羽目になった(603)<sup>16)</sup>。

一介の労働者と資本家の格差は甚だしい。資本家には信用貸しや後払い、年末の決算といった手立てがあるのに対し、労働者にあるのは「日々の決算、後に延ばせない緊急の必要性、哀れな男が午前中に働いた稼ぎで午後に食事を取る妻子」“la cuenta diaria, la necesidad urgente e inaplazable, la mujer y el hijo que comen por la tarde lo que el pobre trabajó para ellos por la mañana.”(207)である。個人と企業の力の差はさらに圧倒的であるが、そのうえいくつかの企業は合併によって巨大化し、「独占体」を形成している。独占体は政治の世界から産業界に転身を果たした暴君であり、「情け容赦のない巨人のように、あらゆる貧者の戸口に座り込んでいる」“El monopolio está sentado, como un gigante implacable, a la puerta de todos los pobres.”、とマルティは言う。独占体が西部の農民の土地を手に入れたければ、強引に買い取るか、さもなくば農民を破滅に追いやる。近辺で農作物を無料ではらまけば、農民は「1年後には飢え死にするが、独占体は儲けがなくとも何年でも生き永らえる」“[El sembrador] al año muere de hambre, mientras que el monopolio sigue viviendo sin ganancia muchos años.”(381)からだ。

さらに、「政治家は金持ちを助け、金持ちは政治家を助けていた」“Ayudaban los políticos a los ricos, y los ricos a los políticos.”(218)。選挙のさいに金持ちは、財力に物を言わせて票を操作し、意中の政治家を当選させる。政治家はその見返りとして、金持ちに都合

のよい政策を推進するのだ。だから、「選挙という馬車は金の車軸<sup>かね</sup>をつけて走っていた」  
“El carro de la elección rodaba sobre ejes de oro.” (219)。1888年の大統領選挙では、保護関税の引き下げを標榜する民主党のクリーヴランド大統領が、高率の関税の維持を訴える共和党候補のハリソンに敗れる。マルティは同年11月2日の通信「選挙！」で、この選挙の内幕を明かしている。クリーヴランドは「少数の企業家の度を越した、憎むべき利益よりも国家の均衡と福利」“el equilibrio y bienestar de la nación antes que el beneficio inmoderado y odioso de una minoría de industriales” (1134)を模索したから、大企業家たちは是が非でも彼の再選を阻止しようとし、不正な手口の限りを尽くした。票が余りそうな選挙区から勝利が危ぶまれる選挙区に味方の有権者を移すため、ホテルの宿泊者名簿を改竄して1ヶ月前からの滞在を装った。立会人の到着をわざと遅らせ、仕事に出なければならない労働者——民主党の支持者が多かった——が投票できないように仕向けた。1ドルの金や一瓶のウィスキー、新しいジャケットで、合衆国の政治に何の関心もない、文字も読めない移民を買収した。「楽団だろうと、焚き火や夜の大騒ぎ、6時間のパレードだろうと、独占体の莫大な資産で買えないものがあるだろうか？」“Músicas, candeladas, vociferaciones nocturnas, procesiones de seis horas, ¡qué no se compra con el tesoro enorme de los monopolios!” (1136)。クリーヴランドはまた、支持を受けた返礼に官職を分配するようなスポイル制（獵官制）の根拠も企てていたから、ニューヨークのタマニー・ホールをはじめ民主党の組織も彼に不満を募らせていた。折しもニューヨークでは州知事選と市長選も行われていて、それらの選挙の民主党候補は政治の腐敗に寛大であった。そこで同州の民主党の不満分子は共和党と票の取り引きをし、州知事選と市長選で共和党の支持者にも民主党候補に投票してもらう代わりに、大統領選では自分たちもハリソン候補に票を投ずることを約束した。

不当な扱いを受ける労働者の憤懣は、マルティの言葉で言えば、「地震の神秘的な力のように私たちの足下で波打つ憎悪、腹を空かせた巨大な鳥のように都市に襲いかかる強風、国を軌道から脱線させてひっくり返し、その根を空気にさらそうとする激しい力」“odios que ondean bajo nuestras plantas como la fuerza misteriosa de los terremotos, vientos que caen sobre las ciudades como una colosal ave famélica, ímpetus que arrancan a las naciones de su quicio y las vuelven del revés, para que el aire ore sus raíces” (727-728)であり、しばしばストライキや暴動となって表面化する。マルティは、8時間労働といった労働者たちの要求を正当だと認めつつも、暴力的な手段に訴えることには当初否定的であった。1883年3月29日の通信で、作家はカール・マルクスの意義を論じ、「弱者の側に立った点で荣誉に値する」“Como se puso del lado de los débiles, merece honor.”としながらも、「善をなす人とは、害悪を指摘し、それを改善しようと高潔な熱望に燃える人ではなく、害悪に対する穏やかな処方教える人である」“no hace bien el que señala el daño, y arde en ansias generosas de ponerle remedio, sino el que enseña remedio blando al daño.”と述べて、マルクス

の性急さと過激さを批判している。なぜなら、「人に向けて人をけしかけるのはおぞましい仕業」“Espanta la tarea de echar a los hombres sobre los hombres.”であるし、「未来の征服は無垢な手でなされるべきだ」“La conquista del porvenir ha de hacerse con las manos blancas.”(240)からだ。そもそも社会正義を実現するために暴力を行使するのは、マルティの見解では、ヨーロッパ移民が合衆国に持ち込んだ方策であった。ドイツ系やポーランド系の移民たちは、「奴隷の憎しみ、他人の財産への欲望、抑圧された国々で定期的に炸裂する反逆への激情、独裁的な政府の土地で人々の心をむなしく苛んでははけ口を求める、人の権力をいっぺんに奪取したいという度外れな欲求を携えて来た」“traían el odio del siervo, el apetito de la fortuna ajena, la furia de rebelión que se desata periódicamente en los pueblos oprimidos, el ansia desordenada de disfrutar de una vez la autoridad de hombres, que en vano les comía el espíritu, buscando salida, en su tierra de gobierno despótico.”(603)。なるほどドイツには、普通選挙も、報道の自由も、法改正のための手続きもなく、「正義が通らないのだから、暴力は正当である」“la violencia es justa, porque no se permite la justicia.”(606)。しかし合衆国には〈自由〉があり、その自由は、不平等な社会の形成を防ぐだけの力ではなかったが、「人々の心を穏やかにし、相手への気遣いと敬意を育み、不要な暴力への嫌悪感を抱かせ、試みや変化を平和裡に提起して獲得するのに必要な手段を提供する。そうした試みや変化は、政治的自由が事実上ないところでは、憤怒と血を行使しても中途半端にしか達成されないものだ」“suavizan [...] los espíritus, crean el miramiento y respeto comunes, inspiran repulsión a la violencia innecesaria, y proporcionan los medios precisos para proponer y conseguir en paz las pruebas y cambios que allí donde no hay libertad política efectiva sólo obtienen a medias la cólera y la sangre.”(734)。そして自由の擁する最大の武器が、「正義の言葉がはらむ抵抗しがたい攻撃力」“la agresión incontrastable de la palabra justa”と「投票権を賢明に、根気よく使うこと」“el uso inteligente y terco del voto”(735)である。

米国社会のさまざまな病弊を批判しつつも、マルティはその自由と民主主義の精神には篤い信頼を寄せていた。合衆国こそ「この地上で最も自由な国」“el país más libre de la tierra”であり、「カリフォルニアの金鉱や西部の恵み豊かな土地よりも、政治上の自由という人を酔わせるこのご馳走を目がけて、世界各地から人々は押しかけてくる」“A esta embriagadora golosina de la libertad política acudieron, más que a las mismas [sic] de California y a las prósperas tierras del Oeste, los hombres de todas partes del mundo”(731)。祖国の独立を生涯の目標として戦い続けたマルティが、どれほど〈自由〉に憧憬を抱いていたかは想像に難くない。また、民主主義の根幹たる選挙制度のことを彼は、「恐ろしくも抗いがたく、厳粛な武器」“un arma aterradora, incontrastable y solemne”と呼び、「人類が自分を導くために編み出した最も有効で情け深い道具」“el instrumento más eficaz y piadoso que han imaginado para su conducción los hombres”(735)と評価する。そして「シルクハットのお偉方も、キャップに作業服の運搬人夫も」“al magnate de sombrero de seda y al cargador de



blusa y cachucha”、同じ列に並んで投票の順番を待つ光景を目にして胸を震わせる。むろん票の売買など、選挙は多くの問題をかかえている。だがマルティはそうした問題を毛虫にたとえ、こんなふうに選挙を弁護する。「毛虫には警戒を払う必要がある。しかし薔薇の美しさに引かれて毛虫が近寄るからといって、薔薇を悪く言ったり、絶望したりすべきではない」“¡Vigílese al gusano; pero no, porque lo atrae con su belleza, se desespere o maldiga de la rosa!” (1133)。

合衆国で際会したいくつもの政治上の出来事や運動に、マルティは暴力を伴わない民主主義的な改革への期待を抱く。たとえば1882年11月の中間選挙では、共和党のスポイル制や大資本家との癒着を批判した民主党が、貧しい人々の支持を集めて勝利する。作家はこの勝利を「流血を見なかった美しい戦闘」“una hermosa batalla en que no se había vertido sangre”、「思慮深い国の賛嘆すべき訴え」“el alarde admirable de un pueblo reflexivo” (223) と称えて、次のように言う。「[この国は]眠れる巨人のようで、苛酷な時期にも自分の力に自信があり、なかなか起き上がろうとしない。しかし結局起き上がり、巨大な<sup>つち</sup>槌をふり上げて敵や障害物を叩きつぶし、また眠りにつく。眠りながらも、耳は聞こえている」“Parece [este pueblo] como gigante dormido, que seguro de su fuerza en la hora dura, no se da prisa a levantarse; mas se levanta, mueve la maza enorme, aplasta al enemigo o al obstáculo y de nuevo duerme. Y en su sueño, oye.” (217)。ここぞと言うときに本領を発揮し、苦もなく危機を乗り越える、そんな底力が合衆国にはあるというわけだ。また、社会思想家のヘンリー・ジョージは、富を再配分する手立てとして土地のみに課税をする「単一税」政策を提唱したが、マルティはこうした主張に、ダーウィンの進化論にも匹敵する影響力の大きさとキリストの教えに比すべき貧者への慈愛を見る（「彼は不幸な人を見ると、頬を平手で打たれたように感じる」“¡Allí donde ve un infeliz, siente la bofetada en la mejilla!”，824）。そして、ジョージが1886年のニューヨーク市長選挙に立候補すると、新たな時代の幕開けを感じてこう叫ぶ、「腐敗が人の骨の髄にまで達することはない。体中が蛆虫に蝕まれていると思われたとき、人は突如としてもっとまばゆい光を放って輝き出す」“No hay podredumbre que le llegue [al hombre] a la médula. Cuando todo él parece comido de gusanos, entonces brilla de súbito con mayor fulgor” (728)。さらにマルティは、労働騎士団の穏健な活動方針にも共感を示す。この労働者の全国組織は、構成員の教育を重視し、労働条件の改善を求める運動の基本方針として「ストライキのかわりに議論、脅迫のかわりに説明や検討、交渉」“En vez de huelga, argumento; en vez de amenaza, exposición, examen y arbitramento.” (614) を掲げていた。

1886年5月、シカゴで開かれた抗議集会は前日、警官隊との衝突で6人の労働者が射殺されたことに怒りの声を上げていた。警官隊が集会を解散させようとしたとき、何者かによって隊列に爆弾が投げ込まれ、多くの死傷者が出る。爆弾を投じた容疑者として8人のアナーキストが逮捕され、そのうちの5人に死刑判決が下った。いわゆるハイマー



ケット広場事件である。マルティは当初、米国世論に同調してアナーキストの蛮行を強く非難したが<sup>17)</sup>、彼らの刑が執行された2日後の1887年11月13日に書かれた通信「壮絶なドラマ」《Un drama terrible》では姿勢を大きく変化させ、彼らに理解と同情を示している。この姿勢の変化はどこからくるのか？ 約1年半の時を経て、マルティの目に事件の真相が次第に明らかになってきた。まず、「充分な証拠によって証明されたのは、敵対するすべての証人の話からしても爆弾を投げた人物は不明ということである」“Lo que sí se probó con prueba plena, fue que, según todos los testigos adversos, el que arrojó la bomba era un desconocido.” (969)。アナーキストたちは無実である可能性があるのだ。それならなぜ、彼らは是が非でも処刑されなければならなかったのか？ マルティはこう答える——「庶民階級の増大する力におののいた国が〔中略〕、共謀にも似た暗黙の取り決めのもとに、犯罪者の狂信の産物であると同時にみずからの罪科の産物でもあるこの犯罪を利用することにし、彼らを見せしめにして〔中略〕血気さかんな新興勢力を怖気づかせようとしたのだ」“Amedrentada la República por el poder creciente de la casta llana [...] determinó valerse por un convenio tácito semejante a la complicidad, de un crimen nacido de sus propios delitos tanto como del fanatismo de los criminales, para aterrar con el ejemplo de ellos [...] a las tremendas capas nacientes.” (959-960)。共謀の仲間はたとえば富裕層であり、彼らは「嘆願と甘言」“a la súplica y a la lisonja” (960) によって州知事を動かし、提出された恩赦の要望を却下させる。この共謀には全米の報道機関も加担しており、報道機関は「裁判をゆがめて伝え」“falseando el proceso”、死刑囚たちを「害獣のように」“como bestias dañinas” 描く一方、「爆弾でばらばらになった警官の写真を毎朝の食卓に届け」“[la prensa] pone todas las mañanas sobre la mesa de almorzar, la imagen de los policías despedazados por la bomba” (969)、残された家族の哀切な暮らしを報じた。こうしてみると、アナーキストたちはむしろ「社会によるテロの犠牲者」“víctimas del terror social” (960) なのだ。彼らの命を奪った絞首台が、ひとりの人物によってキリストの十字架にたとえられていることも、この事実を裏づける。社会が、国家が、暴力に訴えて不平等な体制の維持を図っている。ここに至って、マルティは合衆国の自由と民主主義への信頼を喪失する。「この共和国は富への見境のない信仰ゆえ、いかなる伝統の歯止めもかからないまま、君主制の国家と同じ不平等や不公正、暴力に陥った」“Esta república, por el culto desmedido a la riqueza, ha caído, sin ninguna de las trabas de la tradición, en la desigualdad, injusticia y violencia de los países monárquicos.” (960) のであり、今や「合衆国もヨーロッパと同じ」“¡América es, pues, lo mismo que Europa!” である。民主主義的な手続きが機能しないのであれば、社会改革のために残された手段は実力行使しかない。この通信においてマルティは、微妙な言い方ではあるが暴力を容認する方向に傾いている。「悪があるのが分かると、思いやりのある魂はそれを何とかしようとする。平和的な手立てが尽きると、思いやりのある魂は、蛆虫に生傷をかじられるように他の人の痛みがうずくので、暴力的な措置に訴え

る」“Una vez reconocido el mal, el ánimo generoso sale a buscarle remedio: una vez agotado el recurso pacífico, el ánimo generoso, donde labra el dolor ajeno como el gusano en la llaga viva, acude al remedio violento.” (962)。

### III 膨張主義への反発

合衆国が民主主義の精神を退化させ、君主国家と同じ専横を働くのをマルティは目の当たりにした。そんな合衆国が、ラテンアメリカとの関係強化に乗り出したのだ。その第一歩が、1889年10月から翌年4月にかけて、ワシントンで開催された第一回パン・アメリカ国際会議である。これは米国国務長官ジェイムズ・ブレインの呼びかけで、合衆国とラテンアメリカの18カ国が一堂に会した会議で、南北アメリカの通商関係の増強を目的としていた。マルティは、「ラテンアメリカにおいて独立以来、これほど思慮分別が問われ、警戒が求められ、明晰で入念な検討が必要とされる案件はなかった」“Jamás hubo en América, de la independencia a acá, asunto que requiera más sensatez, ni obligue a más vigilancia, ni pida examen más claro y minucioso” (1330) と述べてこの会議への危機感をあらわにし、十通を超える「ほとんど偏執的な通信」“sus crónicas, obsesivas casi”<sup>18)</sup>を費やして合衆国の狙いを探り、会議の推移を見守った。作家が合衆国進出の脅威について声高に語るようになるのも、このときからである。これらの通信の中から1889年11月2日のものを見ておこう。

マルティは、一国の現在を知るにはその根を見る必要があると言い、合衆国がもともと「オランダ商人と利己的なドイツ人、支配欲の強いイギリス人」からなる国であったこと、奴隷制の上に平然と胡坐をかいていたことを指摘する。また米国の自由が、命を投げ出して他者を救うような「人間味のある友好的な自由であったためしは、うかつでおおらかな若者の時分ですら一度もなかった」“No fue nunca la de Norteamérica, ni aun en los descuidos generosos de la juventud, aquella libertad humana y comunicativa” ことに言及する。かつて賛美していた合衆国の自由を、今のマルティは自分本位に行動する自由としか捉えていない<sup>19)</sup>。独立戦争のさいラテンアメリカから支援を受けながら、こちらの地域が独立する段になると「中立を守るという口実で」“con excusas de neutralidad” 援助を拒んだこと、隣国メキシコの混乱に乗じて「渴望の的であった一地方を生身の肉から切断した」“le sajaron [a México] de la carne viva una comarca codiciada” (1331) ことなど、合衆国の身勝手なふるまいの数々を作家はあげつらう。その膨張への志向は、ダニエル・ウェブスターの「北の偉大な光」、エドワード・エヴェレットの「大陸の統一」といった歴代の政治家の言葉、あるいはサミュエル・スーアルの詩句「どこまでも大陸はそっくり汝らのもの」にも現れているという。

つぎに合衆国の国内事情に目を転ずると、産業界は過度の保護貿易政策に起因する過

剰生産から不況に陥っていた。そこでブレイン国務長官は、余った商品を売りさばく格好の市場としてラテンアメリカに目をつけたのだ、とマルティはにらむ。しかしラテンアメリカは、これまでヨーロッパ諸国と活発な商取引を行なってきた<sup>20)</sup>。したがって、「ラテンアメリカの国々に安価な製品を販売する権利を、政治的服従を求めもせずに資金の前貸しや信用状の供与をしてくれる国々から取り上げて、かわりに開山ずみの鉱山や目に見える利益がないかぎり信用状を開かず、資金も前貸しせず、そのくせ従属だけは要求してくる国のために高価で質の劣る製品を売れるように取り計らうというのは、事前の義務条項によって可能ではあるにせよ、道義に反し、恩知らずというものだろう」“sería inmoral e ingrato, caso de ser posible por las obligaciones previas, despojar del derecho de vender en los países de América sus productos baratos a los pueblos que sin pedirles sumisión política les adelantan caudales y les conceden créditos, para poner en condición de vender sus productos caros e inferiores a un pueblo que no abre créditos ni adelanta caudales sino donde hay minas abiertas y provechos visibles, y exige además la sumisión.” (1337-38)。

以上の理由から、合衆国の動きには「想像が及ぶかぎりのあらゆる歯止めをかけるのが急務である。誠実に考え抜き、対抗勢力を迅速かつ巧妙に増強し、同じ理由から危惧を抱く者たちを臆することなく早急に結束させて真実を告知するのだ」“urge ponerle cuantos frenos se puedan fraguar, con el pudor de las ideas, el aumento rápido y hábil de los intereses opuestos, el ajuste franco y pronto de cuantos tengan la misma razón de temer, y la declaración de la verdad.”と、マルティは訴える。スペインからの解放を最初の独立とするなら、「スペイン系のアメリカは、2度目の独立を宣言すべきときがきた」“ha llegado para la América española la hora de declarar su segunda independencia.” (1330)。

第一回パン・アメリカ国際会議から、もうひとつ別の会議が派生した。1891年1月から4月にかけて、やはりワシントンで開催されたアメリカ大陸通貨会議である(マルティ自身も、ウルグアイ政府の代表として出席している)。この会議の目的は、合衆国の提案に基づいて、アメリカ大陸内の商取引で使用が義務づけられる共通銀貨の創設を検討することであった。同年5月の「ラ・レビスタ・イラストラダ」*La Revista Ilustrada* 誌にマルティが発表した、この会議の報告記事を今度は取り上げよう<sup>21)</sup>。彼はまず、「政治において本当のことは目に見えない」“En la política, lo real es lo que no se ve.”と言って、相手の提案の「隠れた理由」“las razones ocultas”を探る必要性を説く。「いかなる国も自分の利益に反することはしない。ここから導かれるのは、ある国がすることは自分の利益にかなうということだ。2つの国家が共通の利害をもたないならば、手を組むことはできない。手を組めば互いに衝突してしまう」“Ningún pueblo hace nada contra su interés; de lo que se deduce que lo que un pueblo hace es lo que está en su interés”。一国の行なう政治行為は、「その国の気質の諸要素、経済的な要求、政党の要求、政治指導者の要求がからみ合った結果である」“el resultado compuesto de los elementos del carácter nacional, de las nece-

sidades económicas, de las necesidades de los partidos, de las necesidades de los políticos directores.”。だから、祖国を真に愛する政治家は、軽々に相手国の勧誘に応じず、「誘いをかける国と、かけられる国のそれぞれの性格が、どんな要素から成っているのか」“qué elementos componen el carácter del pueblo que convida y el del convidado” (158) を精査し、二国間の提携が自国に益をもたらすか否かを見きわめるだろう。精査の結果、かりに相手国が美德をそなえた偉大な国であることが分かったとしても、それだけでは不十分で、お互いの目指す方向や生き方が一致しなければ共に歩むことはできない。このあたりをマルティは巧みな比喩で説明する——「2羽のコンドルか、2頭の羊がおのおの手を結ぶ方が、コンドルと羊とが手を結ぶよりは危険が少ない」“Dos cóndores, o dos corderos, se unen sin tanto peligro como un cóndor y un cordero.” (159)。

以上を前提としたうえで、マルティは合衆国の今日のあり方を次のように規定する。

物がよく分かり見えている人は、正直にこう言わざるを得ない。〔中略〕今日の合衆国で幅を利かせているのは、貴族の次男坊、三男坊であれ、ピューリタンのブルジョアであれ、反逆的な植民者がもっていた（いつも利己心と征服欲を伴っていたとはいえ）、より人間的で男らしい要素ではない、そうではなくて、先住民を根絶やしにし、別の人種を酷使した奴隷制を促進して暮らしを立て、隣国を屈服し収奪した分子が、ヨーロッパから来る大群にたえず接ぎ木されて穏やかになるどころか、生来の性格に磨きをかけているのだ、と。このヨーロッパの大群は政治上・宗教上の専制主義が生んだ横暴な息子たちであり、その共通する特徴はただひとつ、自分たちのうえに行使された権力を今度は他の者に対して行使したいという蓄積された欲望である。こうした分子は、必要性という野蛮な権利を唯一の権利と信じている——「これは俺たちのものだ。俺たちに必要なのだから」。「ラテン民族に対するアングロサクソン民族」の議論の余地のない優越性を信じている (159-160)。

(Ni el que sabe y ve puede decir honradamente [...] que en los Estados Unidos prepondere hoy, siquiera, aquel elemento más humano y viril, aunque siempre egoísta y conquistador, de los colonos rebeldes, ya segundones de la nobleza, ya burguesía puritana; sino que este factor, que consumió la raza nativa, fomentó y vivió de la esclavitud de otra raza y redujo o robó los países vecinos, se ha acendrado, en vez de suavizarse, con el injerto continuo de la muchedumbre europea, cría tiránica del despotismo político y religioso, cuya única cualidad común es el apetito acumulado de ejercer sobre los demás la autoridad que se ejerció sobre ellos. Creen en la necesidad, en el derecho bárbaro, como único derecho: “esto será nuestro, porque lo necesitamos”. Creen en la superioridad incontrastable de “la raza anglosajona contra la raza latina”.)

建国当初の合衆国が有していた「より人間的で男らしい要素」は、時とともに影をひそめ、移民の影響もあって今では征服欲にあふれた分子が跋扈<sup>ばつこ</sup>している。ラテンアメリカにとって合衆国との結束が適切かどうか、マルティの答えは自明であろう。

次いでマルティは、合衆国の提案する共通銀貨の導入の是非を問う。彼はまず、経済上の同盟と政治上の同盟が不即不離の関係にあることを指摘する。「物を買う国は命令し、物を売る国は仕える」“El pueblo que compra, manda. El pueblo que vende, sirve.” であり、「ある国の貿易において別の国の影響力があまりに強いと、それは政治的な影響力に転化する」“El influjo excesivo de un país en el comercio de otro, se convierte en influjo político.”。それゆえ、「自由でありたいと望む国は、商業において自由であるべきで、同程度の国力をもついくつもの国々に商取引を分散させるべき」“El pueblo que quiere ser libre, sea libre en negocios. Distribuya sus negocios entre países igualmente fuertes.” であり、「手を組む相手は世界であって、その一部ではない」“La unión, con el mundo, y no con una parte de él” (160)。しかるに南北アメリカがヨーロッパと異なる貨幣制度を採用すると、ヨーロッパ諸国との商取引に支障が出るのは避けられない。前述のように、ヨーロッパといえはラテンアメリカの大切な取引先である。大切な取引先をないがしろにして、あまり付き合いのない国の言うことを聞くべきだろうか？ アメリカ大陸通貨会議は結局、開催を提案した合衆国自身、共通銀貨が「魅力的な夢」“un sueño fascinador” (163) に過ぎないのを認め、何の成果も収められずに散会となる。

マルティは、合衆国とラテンアメリカが起源や目的において本質的に異なる2つの地域であることを何度も問題視していた。本質を異にする二地域が足並みを揃えようとしても、悲惨な結果に終わることは目に見えているからだ。1889年12月にイスパノアメリカ文学協会で行なった演説「母なるアメリカ」《Madre América》の中で、作家は両地域の歴史的な歩みを振り返りながら、双方の違いを鮮明にしている。合衆国の歴史は、やはり〈自由〉の概念を軸にして語られる。合衆国が生まれたのは、「燃えさかる自由への思いから」“De lo más vehemente de la libertad” で、「光の冠をかぶった新しい人々は、他のどんな冠にも頭を下げようとはしませんでした」“No querían los hombres nuevos, coronados de luz, inclinar ante ninguna otra su corona.”。海を渡ったピルグリム・ファーザーズは、「暴君のいない心」“el alma sin tiranos” のために「暴君のいない大地」“suelo sin tiranos” (134) を求めている。「権力は皆のもので、それは皆が望む人に委託されました。議員や知事は自分の手で選び、もし知事が議会の召集に難色を示せば、知事の頭越しに「自由な市民」が議会を招集しました” “La autoridad era de todos, y la daban a quien se la querían dar. Sus ediles elegían, y sus gobernadores. Si le pesa al gobernador convocar el consejo, por sobre él lo convocaban los “hombres libres”.”。結局、「生活の中の行ないで、自由の糧とならないものはなかったのです」“no había acto de la vida que no fuera pábulo de la libertad”。こうした自由の空気がみなぎる中にも、マルティはこの国の凶暴な要素を描き込むのを忘れな



い——「彼方の森では、無口な無頼漢が人間や狼を狩りますが、彼は切り倒されたばかりの木の幹か、死んだ先住民を枕にしないかぎり熟睡できないのです」“Allá, por los bosques, el aventurero taciturno caza hombres y lobos, y no duerme bien sino cuando tiene de almohada un tronco recién caído o un indio muerto.”。合衆国は独立戦争で他国の援助を受けながら、のちに他国を助けるのを拒むが、このあたりから合衆国の自由は変質をこうむる。「勝利を取めた自由は、この国と同じくお殿様風、党派的でレースの袖口とビロードの天蓋をもち、人類全体というより地域のためのもの、奴隷にされた民族の肩の上でぐらつく利己的で不当な自由だったのです」“La libertad que triunfa es como él [el pueblo], señorial, y secretaria, de puño de encaje y de dosel de terciopelo, más de la localidad que de la humanidad, una libertad que bambolea, egoísta e injusta, sobre los hombros de una raza esclava” (135)。そして南北戦争の終結とともに、この国を構成する2つの要素がふたび姿を現し、覇権を競い合うという。その一方は、「自分の上に主人を認めず、自分の下に召使いを認めず、穀粒が大地に対して、愛情が人の心に対して行なう以外の征服もまた認めない<sup>ピルグリム</sup>遍歴の人」“el peregrino que no consentía señor sobre él, ni criado bajo él, ni más conquistas que la que hace el grano en la tierra y el amor en los corazones”であり、もう一方は「ずる賢い無頼の強盗で、自分の欲望を唯一の法とし、腕力の及ぶかぎり密林をつき進んで獲物を手に入れる人物、豹と鷲とを友とする孤独で恐るべき人物です」“el aventurero sagaz y rapante, hecho a adquirir y adelantar en la selva, sin más ley que su deseo, ni más límite que el de su brazo, compañero solitario y temible del leopardo y el águila.” (136)。

続いてマルティはラテンアメリカの歩みを略述してゆくが、冒頭で「北のアメリカは<sup>すき</sup>犁から生まれ、スペイン系のアメリカは獵犬から生まれました」“Del arado nació la América del Norte, y la Española, del perro de presa.” (136) と述べて、植民の仕方における両者の相違を端的に示す。なるほど合衆国の過去を描いた部分では、開拓者は汗水流して働いていた。ピルグリム・ファーザーズは、「大地を耕して自分たちが食べる小麦を収穫していました」“el trigo que comen, lo aran” (134) し、クエーカー教徒は「木を倒して学校を建てました」“con los árboles que derriba, levanta la escuela” (134-35)。「自分たちの建てた家で、主人も奴隷も自給自足の暮らしを送り」“En la casa hecha por sus manos vivían, señores y siervos de sí propios”、「勇敢な植民者は」老婆や娘たちと過ごす団欒のひとつきに、「自然を相手に悪戦苦闘する疲れから癒されます」“de la fatiga de bregar con la naturaleza se consolaba el colono valeroso”。合衆国に到着する船が運んでくるのは、「犁や種子や機織り機であり、ハーブや讃美歌や書物でした」“arados, semillas, telares, arpas, salmos, libros”。この列举に「書物」が含まれることから分かるように、彼らの暮らしは知的でもあり、「神秘思想に染まったスウェーデン人や熱血のドイツ人」“suecos místicos, alemanes fervientes”などに先立って、北のアメリカへ渡る人の筆頭に「大学人や教養人」“gente de universidad y de las letras”が挙げられている。「学校では暗記と<sup>むち</sup>鞭で教育が施さ

れていました」“La escuela era de memoria y azotes” (135) とあるように、教育上の規律の厳しさにも言及される。

対して「獵犬から生まれ」たラテンアメリカの植民地時代は、「血に染まり、混乱をきわめた始まり」“los orígenes confusos, y manchados de sangre”であり、征服者たちの残忍さ、宗教上の不寛容、無知や怠惰によって特徴づけられる。インディオに襲いかかるのは、「劣悪なワインや異端者への憎しみとともに育った、余り物の兵士」“la soldadesca sobrante, criada con el vino crudo y el odio a los herejes”である。船に乗ってくるのは、「短い鎖帷子くさりかたびらを身につけた騎士、相続権のない次男坊や三男坊、反抗的な少尉、すきっ腹をかかえた学士や司祭”“caballeros de media loriga, de segundones desheredados, de alféreces rebeldes, de licenciados y clérigos hambrones” (136) である。こうして持ち込まれたのは、大砲、盾、槍、兜といった武具や獵犬ばかりだった。征服者はインディオを罾にかけて乱暴狼藉のかぎりを尽くし、生き残ったインディオからは「狼が人間に化けたこと」“se hubiesen vuelto hombres los lobos.”を嘆かれる。主人も奴隷とともに働いていた合衆国とは異なり、「主<sup>エンコメンデーロ</sup>人<sup>エンコメンデーロ</sup>が食べる食料は、インディオが働いて得たもの”“Lo que come el encomendero, el indio lo trabaja”であり、「旦那さまは散歩にお出かけになる”“De paseo van los señores”。さらに、自分たちの手で議員や知事を選んでいた合衆国とは異なり、「副王や総督や市会議員は、本国スペインから任命されます”“De España nombran el virrey, el regente, el cabildo.”。教育について言えば、「生まれてきた子供は、闘牛のポスターや盗賊をうたった十行詩の歌詞で読み書きを覚え、名門校でも教えられるのは「取るに足らないたわごと」です”“Los hijos que nacen, aprenden a leer en carteles de toros y en décimas de salteadores. “Quimeras despreciables” les enseñan en los colegios de entes y categorías.”。人々は寄り集まって色恋沙汰のうわさ話をしたり、異端者の処刑を見物したり。しかしやがて、「[異端審問所総監の]トルケマダの頭巾の下から血みどろの、剣を手にした大陸が救い出されて姿を現します”“¡De debajo de la capucha de Torquemada sale, ensangrentado y acero en mano, el continente redimido!” (137)。マルティによれば、ラテンアメリカの独立はクリオーリョ（新大陸生まれのスペイン人）や混血のメスティーソのみならず、各地域のインディオやアフリカ系の人々がみなで力を合わせて達成したものだ。

マルティは、ラテンアメリカの植民地時代と独立後との間の大きな差異を際立たす。「こうした毒のすべてを、私たちは樹液に変えました”“¡Y todo ese veneno lo hemos trocado en savia!” し、「汚物溜めであった私たちは、今や坩堝るつぼになろうとしています。大蛇のうえに私たちは国を築きました。[征服者]アルバラードの槍を私たちは鉄道でなぎ倒し、異端者が火あぶりになった広場に図書館を建てました”“Sentina fuimos, y crisol comenzamos a ser. Sobre las hidras, fundamos. Las picas de Alvarado, las hemos echado abajo con nuestros ferrocarriles. En la plaza donde se quemaba a los herejes, hemos levantado bibliotecas.” (138)。一人称複数の主語「私たち」が何度もくり返され、こうした文明化の事業が他ならぬ自

分たちの努力の成果であることが強調される。過去が野蛮であればあるほど、それを克服した「私たち」の手柄は大きくなる。「だから、私たちは〈われらのアメリカ〉を誇りに思いながら、この地で暮らしています」“Por eso vivimos aquí, orgullosos de nuestra América” (140)。こうしてみるとマルティの描く図式では、ラテンアメリカが汚濁の底から「英雄的で、同時に仕事熱心な」“heroica y trabajadora a la vez” (139) 現在のあり方にまで急上昇したのに対し、合衆国は自由の劣化や無頼漢の跳梁により、下降線をたどっているのが分かる。これほど起源も方向性も異なる二地域は、やはり提携すべきではなく、ラテンアメリカは独自の道を進むべきなのだ。

マニフェスト的な論考「われらのアメリカ」(1891年)も、「こちらのことを知らない途方もない隣人の軽蔑が、〈われらのアメリカ〉の最大の危険である」“El desdén del vecino formidable, que no la conoce, es el peligro mayor de nuestra América” ことを認め、「〈われらのアメリカ〉の緊急の義務は心と意思をひとつにして、自分たちがどんな存在かを教えることだ」“el deber urgente de nuestra América es enseñarse como es, una en alma e intento” (22) と勧告する。しかしこの論考の批判の矛先は、合衆国の拡張主義、作家の言葉でいえば「外にいる虎」“el tigre de afuera” よりむしろ、「内なる虎」“el tigre de adentro” (21)、すなわちラテンアメリカに住みついた敵に向けられている。そうした敵は一方では、「7レグア〔約39キロメートル〕の長靴をはいた巨人」“los gigantes que llevan siete leguas en las botas” が忍び寄るのにも気づかない井の中の蛙の「田舎者」“el aldeano” (15) であり、もう一方では祖国にいわれのない侮蔑の念を抱き、外来のものなら何でも礼賛する「ヤンキーかぶれ」“la yanquimanía”<sup>22)</sup>である。後者は、合衆国やフランスの法で祖国を治めようとして失敗するが、それも当然であって、「[米国の初代財務長官] ハミルトンの発布した法令では、大草原に住む男が操る若馬の体当たりは止められない」“Con un decreto de Hamilton no se le para la pechada al potro del llanero.” (17) のだ<sup>23)</sup>。よき為政者とは、自国を構成するさまざまな要素を熟知し、それを自国の方式でうまくまとめ上げる人である、とマルティは言う<sup>24)</sup>。国づくりの根幹にすべきは、〈土地本来のもの〉la Naturalezaである。「バナナでワインをつくる。かりに酸っぱくても、それが私たちのワインだ!」“El vino, de plátano, y si sale agrio, ¡es nuestro vino!” (20)。そしてラテンアメリカの〈土地本来のもの〉には、インディオも、アフリカ系住民も、あらゆる人種が含まれる<sup>25)</sup>。内外の虎の侵攻を防ぐ戦いでは、みな「胸と心をひとつにして」“con un solo pecho y una sola mente”、列を組んで前進しなければならない。「もし将軍が歩兵隊をしんがりに残すと、騎兵隊が敵に取り囲まれてしまう」“O si deja a la zaga a los infantes, le envuelve el enemigo la caballería.” (21) からだ。

## 結び

何度か引用した 1880 年の「合衆国の印象」で、マルティは合衆国をすでに「このすばらしくも病める国」“this splendid sick people” (1733) と規定していた。科学技術の発達、経済的繁栄、自由と民主主義の伝統など、この国は羨望に値する美質をいくつも具えていた。その一方、<sup>しゅくあ</sup>宿痼と言すべきなのが「富への過剰な愛」“el excesivo amor a la riqueza” (269) であり、それが富裕層の利己的な欲望をつのらせて労働者を搾取する仕組みを生み、ひいては民主主義の精神を瓦解させるに至ったのだ。「一体どこへ行ってしまったのだ、市民権に対する米国人の敬意は？ 自由意志の行使への揺るぎない信頼は？」“¿Dónde está ya aquel respeto del Americano por su ciudadanía, aquella fe inquebrantable en el ejercicio del libre albedrío [...]?” (810) と、1887 年の通信でマルティは叫ぶ。合衆国の強欲さが民主主義の歯止めを失った今、この国と手を取り合うのは〈われらのアメリカ〉にとって危険きわまりない。ましてや合衆国とラテンアメリカは、本質を異にする地域でもある。

合衆国の物質主義や金銭万能主義への批判は、もちろん目新しいものではない。マルティの記事の真価はそうした批判自体にあるのではなく、細かい観察に基づく具体的な情報によって批判を肉付けし得たところにあるのだろう。本稿のⅡの始めの方で紹介した石炭の運搬人夫をめぐる通信において、マルティは学者たちが実態を知りもせずに労働者の生活を論評するのに反発し、「労働者の状況についてまともなことを言いたいならば、彼らの許に降り立ち、その悲惨さを間近に知るべきだ」“los que deseen hablar con juicio sobre la condición de los obreros deben apearse a ellos, y conocer de cerca su miseria.” (831) と訴えている。なるほど、続く運搬人夫の暮らしぶりの叙述は、労働時間や賃金を含めて詳細にわたっている。論考「われらのアメリカ」で説かれるように、「知ることは解決すること」“Conocer es resolver.” (18) なのだ。

アンドレス・イドゥアルテは、「スペイン語圏の作家で〔中略〕マルティほど合衆国を肌身で感じ、知悉している人は誰もいないし、他の言語でも彼に比肩する人はなかなか見つかるまい」“ningún otro escritor de habla española [...] ha sentido y conocido a los Estados Unidos tanto como Martí. Y difícilmente se le encontrará rival en otras lenguas.”<sup>26)</sup>と言う。マルティ自身、このことは自負していて、親友マヌエル・メルカードに宛てた絶筆となった手紙の中で合衆国を怪物にたとえ、「私は怪物の体内で暮らしてきて、その内臓をよく知っています」“Viví en el monstruo, y le conozco las entrañas.”<sup>27)</sup>と書いている。この〈内臓〉entrañas というのは、マルティがたびたび用いるお気に入りの言葉であるが、体内の奥深くにあって外から見えない点で、政治に似ている（「政治において本当のことは目に見えない」、158）。マルティが合衆国の南方進出を十年も前に予見できたのは、米国社会の

諸相を長年にわたって凝視し、この「見えないもの」を洞察せんと格闘し続けた結果であった。

## 注

- 1) 本稿では「ラテンアメリカ」という呼称を、旧スペイン領の中南米諸国、つまりイスペインアメリカ諸国を指すのに用いる。
- 2) Rubén Darío, “El triunfo de Calibán,” en *El modernismo y otros ensayos*, Madrid: Alianza Editorial, 1989, p. 161.
- 3) ノエル・サロモンは、メキシコの「科学主義者」científicos やアルゼンチンの「1880 年の世代」を例に引きながら、合衆国の独立以来、ラテンアメリカの人々がいかにこの国を自分たちの目指すべき理想と見なしてきたかを略述する。それと同時に、合衆国が富の追求に余念のない利己的な国であるとの通念も、1850 年ころにはラテンアメリカに定着していたと言う (Noël Salomon, “José Martí y toma de conciencia latinoamericana,” en Saúl Sosnowski (ed.), *Lectura crítica de la literatura americana*, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1996, tomo 2, pp. 223–228.)。
- 4) Domingo Faustino Sarmiento, *Conflicto y armonía de las razas en América* (1883) (Buenos Aires, 1915), p. 456. (Julio Ramos, *Desencuentros de la modernidad en América Latina: literatura y política en el siglo XIX* (México: Fondo de Cultura Económica, 1989 (2003, 1ª reimpresión), p. 236.) より引用)。
- 5) 日本語で読めるマルティの著作に『ホセ・マルティ選集』(全3巻、牛島信明ほか訳、日本経済評論社、1998–2005年)がある。また、彼の生涯を略述した評伝には、H・アルメンドロス『椰子より高く正義をかかげよ／ホセ・マルティの思想と生涯』(神尾朱美訳、神代修監修、海風書房、1996年)がある。
- 6) José Martí, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, ALLCA XX, 2003, p. 1330. この先マルティの新聞・雑誌記事からの引用は、原則としてこの版を底本とし、引用の後にページ数のみを記す(同じページからの引用が続く場合には、最後の引用にのみページ数を付す)。引用はすべて拙訳であるが、前の註で言及した『選集』に翻訳がある場合には、これを参考にさせていただいた。〔 〕内は、執筆者の補足的な説明である。
- 7) David Lagmanovich, “Los Estados Unidos vistos con ojos de nuestra América”, en José Martí, *op. cit.*, p. 1857.
- 8) スサーナ・ロトケルも指摘するように、ここの〈自由〉はあくまでマルティの空想の産物であり、「自由の女神像」ではない (Susana Rotker, *The American Chronicles of José Martí: Journalism and Modernity in Spanish America*, University Press of New England, 2000, p. 91)。「自由の女神像」がリバティ島に建立されるのは、3年後の1886年のことである。
- 9) Julio Ramos, *op. cit.*, p. 166. ただしフリオ・ラモスによれば、橋の技術的な問題に関するマルティの説明は、同じ話題を扱ったW・C・コナントの記事 (William C. Conant, “The Brooklyn Bridge”, *Harper’s New Monthly Magazine*, LXVI, december 1882–may 1883, pp. 925–946.) の翻訳に近く、コナントの記事の方は、橋を設計したローブリング (父) の計画書に依拠しているという (Julio Ramos, *op. cit.*, p. 167)。
- 10) 「合衆国の印象」(1880年)で、マルティは「サイズと数量。これが、この国において偉大さを測る尺度である」“Size and number: these are here the elements of greatness”. (1733) と言う。
- 11) 記事の日付は、新聞・雑誌への掲載日ではなく、マルティが執筆した日を記す。



- 12) マルティは、1882年にニューヨークで書いた詩「大都会の愛」《Amor de ciudad grande》(『自由な詩』*Versos libres* (1913 年刊) 所収)でも、精神性に欠けた愛を批判的にうたっている。「人は立ったまま通りで、／サロンや広場の埃のなかで愛し合う。／咲いたその日に花は死ぬ」“Se ama de pie, en las calles, entre el polvo / De los salones y las plazas; muere / La flor que nace”. (José Martí, *Obras completas*, La Habana: Editorial de Ciencias Sociales, 1963–65 (1975<sup>2</sup>), XVI, p. 170.)
- 13) ミンストレルとは本来、ヨーロッパ中世の吟遊詩人のことであるが、合衆国ではアフリカ系の人々の生活習慣を面白おかしく演ずる見世物、およびその芸人を指す言葉となった。
- 14) フリオ・ラモスによれば、マルティがラテンアメリカの精神性や知性を標榜したのは、合衆国の産業技術や物質主義に対抗し、同胞の諸国のアイデンティティを創成するための一種のレトリックであった (Julio Ramos, *op. cit.*, pp. 150–151.)。柳原孝敦が同名の著書 (エディマン／新宿書房、2007 年) で系譜をたどった「ラテンアメリカ主義のレトリック」とは、まさにこのレトリックに他ならない。
- 15) Juan E. Mestas, *El pensamiento social de José Martí: ideología y cuestión obrera*, Madrid: Editorial Pliegos, 1993, p. 100.
- 16) ポール・エストラードによれば、こうしたマルティの分析は一面的であり、イギリスやアルゼンチンのような自由貿易の国もまた 1890 年には不況に陥ったことを説明できない (Paul Estrade, *José Martí: los fundamentos de la democracia en Latinoamérica*, Madrid: Ediciones DOCE CALLES, 2000, p. 138.)。
- 17) たとえば、1886 年 9 月 2 日の通信「シカゴの 7 人のアナーキストの裁判」《El proceso de los siete anarquistas de Chicago》などで。
- 18) Julio Ortega, “Martí y la praxis de la escritura”, en *El discurso de la abundancia*, Caracas: Monte Avila Editores, 1992, p. 137.
- 19) 「自由の女神像の除幕式」《Fiestas de la Estatua de la Libertad》を描いた 1886 年 10 月 29 日の通信においても、マルティはフランスが合衆国を独立戦争のさいに支援したことに触れ、「気前よくて開放的な」「generosa y expansiva」フランスの自由と「利己的で欲得ずくな」「egoísta e interesada」合衆国の自由とを区別している (761)。
- 20) アルゼンチンを例に取れば、1888 年の貿易総額のうち、約 3 分の 1 をイギリスが、5 分の 1 以上をフランスが、10 分の 1 強をドイツが占め、合衆国の占める割合は 12 分の 1 に過ぎなかった (Roberto Fernández Retamar, “Prólogo” a José Martí, *Política de nuestra América*, México: Siglo XXI, 1977 (1989<sup>6</sup>), p. 17.)。
- 21) 報告記事「アメリカ大陸通貨会議」《La conferencia monetaria de las repúblicas de América》と、続いて取り上げる演説「母なるアメリカ」および論考「われらのアメリカ」は、José Martí, *Obras completas*, VI より引くこととし、引用の後にページ数を付す。
- 22) 「ヤンキーかぶれ」という言葉は、評論「合衆国の真実」《La verdad sobre los Estados Unidos》(1894 年) の中で使われている (José Martí, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, p. 1755.)。
- 23) ここでマルティが「外国かぶれ」として暗に批判しているのは、実証主義を信奉し、外国資本を導入して国の近代化を推し進めたボルフィリオ・ディアス政権下のメキシコであるという (Julio Ramos, *op. cit.*, p. 236; 柳原前掲書、179 頁)。
- 24) 「自国の問題は、借り物ではない自国の方式で対処すべきだ」という考えは、マルティの生涯を貫く根本思想のひとつで、1875 年にメキシコで書かれた雑誌記事にも、「固有の歴史には固有の解決を」“A propia historia, soluciones propias” とある (José Martí, *Obras completas*, VI, p. 312.)。合衆国の労働運動においては暴力の行使は不適であると彼が判断したもの、つ

- き詰めればそれが「土地のものではない」「no es de la tierra」(603)からだ。
- 25) ロドーは、合衆国の物質文明とラテンアメリカの精神文化を対峙させる構図をマルティから受け継いだが、エリート主義的な彼の視野からは、インディオやアフリカ系住民の存在が欠落していた。
- 26) Andrés Iduarte, “Estados Unidos”, en José Martí, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, ALLCA XX, 2003, p. 2019.
- 27) José Martí, *Obras completas*, IV, p. 168.

## 参考文献

- Darío, Rubén, “El triunfo de Calibán”, en *El modernismo y otros ensayos*, Madrid: Alianza Editorial, 1989, p. 161–166.
- Estrade, Paul, *José Martí: los fundamentos de la democracia en Latinoamérica*, Madrid: Ediciones DOCE CALLES, 2000.
- Fernández Retamar, Roberto, “Prólogo” a José Martí, *Política de nuestra América*, México: Siglo XXI, 1977 (1989<sup>6</sup>).
- Iduarte, Andrés, “Estados Unidos”, en José Martí, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, ALLCA XX, 2003, pp. 2006–20.
- Lagmanovich, David, “Los Estados Unidos vistos con ojos de nuestra América”, en José Martí, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, ALLCA XX, 2003, pp. 1848–61.
- Martí, José, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, ALLCA XX, 2003.
- , *Obras completas* (en 27 vols), La Habana: Editorial de Ciencias Sociales, 1963–65 (1975<sup>2</sup>).
- Mestas, Juan E., *El pensamiento social de José Martí: ideología y cuestión obrera*, Madrid: Editorial Pliegos, 1993.
- Ortega, Julio, “Martí y la praxis de la escritura”, en *El discurso de la abundancia*, Caracas: Monte Avila Editores, 1992, pp. 133–138.
- Ramos, Julio, *Desencuentros de la modernidad en América Latina: literatura y política en el siglo XIX*, México: Fondo de Cultura Económica, 1989 (2003, 1<sup>a</sup> reimpresión).
- Rotker, Susana, *The American Chronicles of José Martí: Journalism and Modernity in Spanish America*, University Press of New England, 2000.
- Salomon, Noël, “José Martí y toma de conciencia latinoamericana”, en Saúl Sosnowski (ed.), *Lectura crítica de la literatura americana*, tomo 2, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1996.
- アルメンドロス、エルミノ 『椰子より高く正義をかかげよ／ホセ・マルティの思想と生涯』(神尾朱美訳、神代修監修)、海風書房、1996 年。
- マルティ、ホセ 『ホセ・マルティ選集』(全 3 巻、牛島信明・青木康征・後藤政子ほか訳)、日本経済評論社、1998–2005 年。
- 柳原孝敦 『ラテンアメリカ主義のレトリック』エディマン／新宿書房、2007 年。